

シニア

新型コロナウイルスの感染拡大で、弔いの場にもさまざまな影響が及んでいる。参列者による「3密」を避けるため、参加人数を抑制したり、葬儀を簡素化したりする例が一般化。故人との最後の別れをどう行ったら穏やかに送り、遺族の悲しみや苦しみを和らげることができるのか、関係者は試行錯誤を続けている。

9月下旬、札幌市中央区の葬儀場で堀川京子さん（享年90）の葬儀が営まれた。会場入り口には消毒液が置かれ、扉を開けて椅子同士の間隔は広めに取るなど感染防止対策を徹底した。

夫に先立たれた堀川さんに子供はおらず、葬儀会場には親戚、兄弟ら約20人。生前は町内会の活動や登山と活発に過ごしたという。実弟で十勝管内芽室町の元教員、後藤正弘さん（82）は友人、知人と呼び、故人をしのんでほしかったが、「感染を広げる可能性があるためやむを得なかった。致し方ないが残念です」。

「ご焼香、随時」

葬儀にはコロナに感染すると重症化が懸念される高齢者が比較的多く参列するため、感染拡大を防ぐ観点から参加人数を絞る例が一般化した。通夜は通常、午後6時からの開始だが、おむね同4時〜4時半から始め、知人や友人らが会場

参加人数抑制、式の簡素化…

葬儀 感染防止へ試行錯誤

に来て焼香、遺族へのあいさつを済ますと手早く帰ってもらう形が普及した。新聞のおくやみ欄にある「ご焼香、随時」がこれに当たる。訃報の連絡も身内だけで済まし、友人、知人を招かずに終え、「葬儀終了」を新聞でお知らせする人も目立つ。

道内約120の葬儀会社

が加盟する北海道葬祭業協同組合（札幌）も一般の会葬者の参列を極力遠慮してもらおうと促している。中島浩盟副理事長（59）は「はなはだ礼を失うことになるが、ご理解をいただきたい。お経を聞かずお引き取りを願うため、数分後にする参列者も多くなっています」と話す。

通夜の終了後、飲食をしながら故人をしのぶ通夜ぶるまいも、飛沫の恐れから控える傾向が強い。札幌市内の葬儀会社の担当者は「弁当を用意して持ち帰っ

てもらうケースも多く、故人の思い出を語り合ったり、忍ぶという場面がめつきり少なくなりました」と残念がっている。

後悔ない別れに

故人との別れは突然訪れ、慌ただしい中で葬儀の準備をしなければならぬ。老舗の葬儀会社、公益社（札幌）の長門道人管理部長（47）は、コロナ禍で20〜30人の小規模の葬儀が多くなったことから「終了後、多くの方に参列してほしかったとの声をよく聞

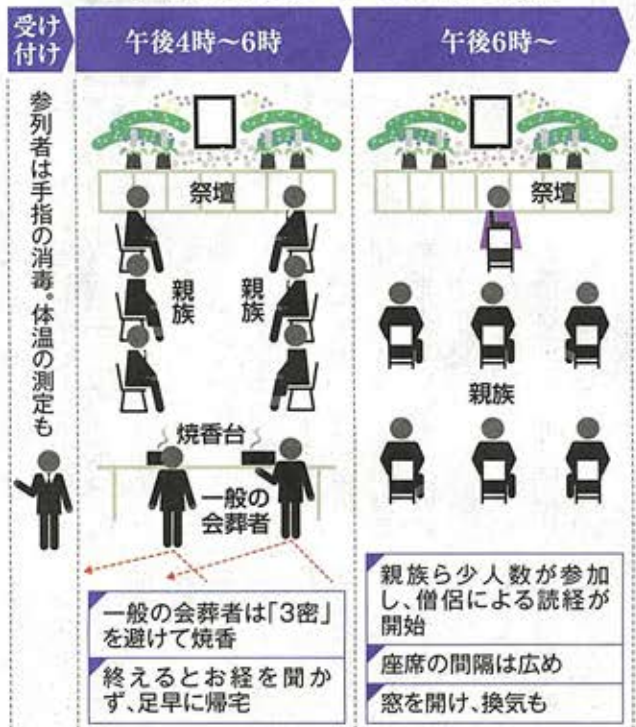
きするようになりました」という。そのため、葬儀に向けた事前相談はより丁寧に行う必要があるとし、「最後のお別れで後悔のないように接したい」と語る。

関係者の懸念は、葬儀の簡略化の流れがコロナ禍で一層進むことだ。電話で仏教に関する悩み、相談を聞いている一般社団法人、仏教情報センター理事長で浄土宗戒法寺（東京都品川区）の住職、長谷川岱潤さん（66）は「参列者が減る傾向は以前からだが、若い世代が葬儀に参列しないと、儀式の意義が伝承されなくなる」と危機感は強い。

長谷川さんは、誰がいつ来ても気持ち良く墓参りできるよう寺にある墓所の清掃に努め、含蓄のある法話をホームページで流すなど「地道な取り組みを進めるしかない。時代の流れは厳しさが、若い世代とのつながりを深める努力を続けた」と話している。

意義伝承に関係者ら危機感

コロナ禍で行われている通夜の流れ



新型コロナウイルスの感染防止のため、消毒液が置かれた葬儀会場
＝9月、札幌市中央区